

「多元的歴史叙述」

このタイトルは、今日の講演テーマに近い内容のエッセイを 10 年近く前の『民博通信』に書いたことがあります。そのときのタイトルです。しかし、現在の研究はむしろ「多元的 “地域” 叙述」と言ってもいいようなものであり、今やっているのは歴史というよりも現状分析というか、フィールド調査を中心とした現代のこととして、それをどう歴史に結び付けられるかということを考えています。というのも、私の頭の中では、時間と空間、つまりは歴史学と地域研究は融合して一体化しているからです。

これまでも、時間と空間というものは自分の研究の二つの基本的な軸であり、その枠組みの中でずっと研究をしてきました。したがって、歴史をやっている空間との関係の中では現代とつながりますし、現代の空間のことをやっても、どうしても歴史のことが気になるという形で、時間と空間を行ったり来たりしてきたというのが現在のところです。したがって、今日のタイトルを「多元的歴史叙述」としましたが、多元的というのは変わりませんが、「多元的地域叙述」でもいいかなと思っています。

エジプト社会経済史という研究課題

私がエジプトの社会経済史を研究課題にした経緯は、今日の講演タイトルとしたエッセイ（『民博通信』2001 年 No.93）に書いていますので、その冒頭の文章を紹介します。

「エジプトはナイルの賜物」。これは、誰もが知るギリシャの歴史家ヘロドトスの有名な言葉である。この言葉に象徴されるように、エジプトは古来、ナイルの水を利用した豊かな農業文明を育んできた。地中海周辺に相次いで勃興した強大な政治勢力はすべて、その農業資源の豊かさに引かれ、エジプトの征服、支配を企てた。しかし、時間とともに、どの政治勢力も「エジプト化」された。

ナイルはすべてを飲み込む胃袋であった。権力者たちは、エジプトの富を最大限に搾取するため、中央集権的な支配機構をはりめぐらせた。しかし、エジプトを舞台に展開した歴史絵巻の主人公は、こうしたうつろい行く権力者たちではなく、エジプト文明を育んだナイルであり、その水に生活のすべてをかけ、黙々と働く農民たちであった。

もう四半世紀以上も前になるが私がエジプトの社会経済史を研究課題と定めたときの私のエジプト観は以上のようなものであった。そこには、外国の歴史に興味を持つ日本の若者を取り巻いていた当時の知的環境がよく示されている。まず、そこにはプリミティブでロマンティックな異文化に対する知的好奇心がある。当時、日本では、やっと海外渡航が高嶺の花でなくなり、大学院生でも海外留学できる環境が整ってきていた。

次いで、専攻・方法論としての歴史学、テーマとして農業と農民に対する重視がある。当時の日本の人文社会科学の領域では、歴史学、その中でも、農村を舞台とした社会経済史が大きな影響力を持っていた。日本の社会、とりわけ農村にはいまだ封建

遺制が残っており、それを払拭し、経済と社会を発展させる鍵は農業の近代化と農民の生活改善であり、人文社会科学はそのための手段であるとされたからである。こうした農本主義に通じる農業部門への重視には、日本の、そして日本が近代国家建設のモデルとした西欧の歴史における発展パターンが反映していた。つまり、経済の農業革命から産業革命への、社会の絶対主義革命から市民革命への、段階的な歴史発展パターンである。

この点、エジプトは若き私の問題関心にとって格好な研究テーマであった。まず、エジプトは典型的な農業立国であった。また、ナセルを継いで大統領になったサダトは後に本格的な開放経済を取ることになるが、その初期の統治では、依然としてナセル時代と同様に、封建的、植民地的遺制を払拭するための政治革命と経済革命の同時進行をうたっていた。実際、当時のエジプトでは、ナセル時代のアラブ社会主義体制でのイデオロギーであったマルクス主義的階級史観の強い影響のもと、農民を主人公とするエジプト国民による国民国家エジプトの建設の過程をもってエジプトの近代史とする民族主義史観が歴史学界を覆い、体制擁護のイデオロギーとなっていた。有能な人文社会科学の研究者の多くが歴史、それも農業に関する社会経済史を専攻していた。

さらに、エジプトはその砂漠に囲まれた地形、比較的等質的な住民構成、長い領域国家としての歴史から、中東では例外的に、近代の早い時期に成熟した国民国家を建設し得る環境と状況に恵まれていた。そのため、エジプト人研究者による自国の歴史叙述は、顕著なエジプト中心主義を背景とした、一国史観に彩られていた。この一国史観による歴史叙述という点においても、当時のエジプトと日本の歴史学界は動向を同じくしていた。かくして日本の学界動向を強く反映した私の個人的問題関心と研究対象国であるエジプトの学界動向はほぼ同じ方向を向いていた。私の研究生活は快適であった（その成果が『私的土地所有権とエジプト社会』である）。

この文章に見られるように、当時の日本の学界の動向を考えるならば、私のエジプト研究の出発点は極めてオーソドックスなものだったと思います。つまり、現代を知るためには近代の理解が不可欠であり、とりわけ 19 世紀の封建的な時代から近代的な時代への移行を扱う近代史が現代へ至る転換期として極めて重要であると皆が思い、私もまたそう思っていました。

それから、農業への関心がありました。とりわけ農業立国であるエジプトの場合には、土地問題は決定的に大きかったわけです。19 世紀の中葉には、さまざまな近代的な土地関係法令が公布されていました。そこで、日本での土地制度史研究と連動するような形で、エジプトの土地制度史を中心に社会経済史を研究しようという気になったわけです。

ですから、私が社会経済史に関心を持ったのは、何のてらいもない、そのときの学界動向に沿ったものでした。もちろん、中東アラブ、あるいはエジプトに興味を持ったということ自体は少し変わっていたかもしれませんが、その研究の発想やスタイルは極めてオーソドックスだっ

たということになるわけです。

『私的土地所有権とエジプト社会』の方法論

今から振り返ってみますと、『私的土地所有権とエジプト社会』の方法論的な特徴は次の 3 点に整理できるかと思います。1 点目は「全体性への志向」といいますか、研究対象をさまざまな角度から包括的に見るということです。今では流行らなくなったのかもしれませんが、経済史ではなくて社会経済史、政治経済史、それから文化経済史、要するにさまざまな角度から特定の研究対象を多面的に見るという姿勢です。

第 2 点は、「内在的批判への志向」といいますか、ある研究対象をつかまえるときに、社会科学の既存概念をそのまま使って議論をすることに何となく落ち着きの悪さを感じていました。それは第 1 点目の「全体性への志向」と似通った感覚なのだと思いますが、既存概念を適用する前に、とにかく資料に現れている言葉の意味を分析して、それを概念化するというプロセスを経ないと、何となく収まりが悪いというか、何か充実感がないという感覚がありました。

第 3 点は、資料の扱いですが、一つの資料に集中して、いくつもの性格が異なる資料を雑多に使わないということです。また、論証においても、いろいろなデータや情報や文献を総動員して自分の論を展開していくというプロセスがどうも嫌いで、一つの種類の資料をしっかりと読み込みました。それは、例え同じテーマであっても、資料が違えばもう一回やり直して、もちろん結論は比べるわけですが、とにかく一つの資料を集中して深く読み込むという資料操作の方法です。

以上の 3 つが、受賞作を振り返って言える私の研究姿勢の特徴なのですが、それをもう少し本の内容に踏み込んで敷衍してみますと、次のようなことになると思います。

この本を書く目的は、先ほど述べましたように、19 世紀中葉をエジプトの転換期としてとらえて、当時の農村社会の変容を分析するというところにあったわけです。その際、資料の入手可能性などを考慮して、土地制度に関する法資料に注目しました。実際のところは、ある程度の分量を持って私に取り扱える資料としては法資料しかなかったという事情もありました。

そこで、まず私が試みたのは、資料を雑多に使うのではなく、とにかく法資料を網羅的に集めて、それをテーマごとに時系列に並べることでした。それは、ちょうど法を統計のように扱い、テーマごとに時系列に並べて、大きなパターンやトレンドが確認できるように整理し直すという作業です。

その上で、法資料をじっくりと読み込んでいこうと覚悟を決めたわけですが、その過程でいくつかの思いもしなかったような事実が分かってきました。それは、さきほど「内在的批判」と言いましたが、例えば「私的土地所有権」の「所有権」というアラビア語がどういう意味を持

つ言葉なのかをしつこく検討しているうちに気付いたことです。

そして、そこには従来私が考えていたのとは相当違った所有権構造があることが少しずつ明らかになってきました。それは後に東京大学の柳橋さん等のイスラム法専門家によって指摘されていることであり、現在の研究者には不思議でも何でもないことだと思いますが、当時の私には驚きでした。

当初、私の研究スタンスは、土地制度の近代化を私的所有権の確立をもって跡付けるという、当時の日本あるいはエジプトの研究者の標準的な研究スタンスに倣っていたのですが、法資料を読み込んでいく過程で、こうした近代的な土地所有権という概念を使ってアラビア語の「所有権」に相当する言葉を解釈しようとすると、論理的な矛盾が生じてしまうことに気付いたのです。そこでいろいろと困惑したのですが、ひょっとしたらイスラム法の所有権の規定は近代的な所有権と全く異なるものであって、近代的な所有権の概念を当てはめること自体がこうした論理の矛盾を引き起こすのではないかと考えました。

そこで、近代的な所有権という概念から離れ、イスラム的な所有権とはどういうものであったのかということから 19 世紀中葉の一連の土地関係法令を読み直してみようと思ったわけです。その結果、明らかになったのは、イスラム法における所有権の構造は、近代的な社会で想定されるような排他的利用権から成るものとは全く異なっていました。それは一口で述べれば、土地・物自体とその利用権がともに所有の対象となる、極めて重層的な所有権構造があったのです。これは前近代の社会ではどこでも見られたようですが、当時このことに無自覚であった私には新しい発見に思えたといわけです。『私的土地所有権とエジプト社会』はこの「新しい発見」を中心に執筆したものです。

『私的土地所有権とエジプト社会』以降の研究

これまでずっと関心があるのは、ミクロとマクロ、それから統一性と多様性という、同時に把握することが困難な 2 つを同時に考えることです。これらは社会科学における永遠の矛盾というか、袋小路（アポリア）のようなものであって、分析のレベルの統一性はなかなか取れないと思いますが、それでも常に私の頭の中にあります。

まず、ミクロ的な関心は、歴史研究者としての個別性、具体性への志向でして、『私的土地所有権とエジプト社会』の研究で利用した法資料から出発して、次第に手書き文書、あるいは聞き取り調査へと発展した、固有名詞にこだわった事件や訴訟の研究に取り組んできました。

その一方で、マクロ的な関心も大いにありまして、その一つが文明に対する関心です。その経緯については、『比較文明』（第 25 号、2009 年 11 月発行）に「イスラムと文明化」というタイトルのエッセイを書きましたので、その冒頭部分を紹介します。

私の専門は、近代を中心としたエジプト社会経済史である。個別性にこだわる歴史家として、村などの小さな社会や訴訟などの事件を好んで研究対象にしてきた。しかし、同時に、自分の研究対象をより広い文脈の中で位置づけたいという欲求も持ち続けてきた。文明へのこだわりも、この後者の欲求ゆえであった。実際、自分のフィールドを超えてものを考える際、文明は一つの基調音であった。…さて、いつ文明に対して自覚的な関心を持ち始めたのかは、今となっては定かでない。しかし、文明に関心を寄せる直接のきっかけが何であったにせよ、その初期にあって、私の関心は文明そのものというよりは、文明という概念を使っての、当時の歴史学の主流に対する批判にあった。当時の歴史学の主流とは、一言で述べれば、国民国家を単位とした歴史叙述である。しかし、当初より、このような批判があったわけではない。…

『私的土地所有権とエジプト社会』から出発したミクロ的な固有名詞にこだわった研究を進めるなかで、なぜマクロ的なものにも興味を持ったかということ、個々具体的な事件や訴訟の意味を問うほど、実はその事件や訴訟を取り巻く法体系や司法制度というものが重要なのだということにあらためて気が付いたからです。

つまり、研究対象に意味を付与するものは、実は事件そのものの内容であるよりも、その事件を取り巻く文脈にあるということに気付いたのです。そのためにマクロ的な大きなパターン・トレンドを抽出するという作業を、個々具体的なケースの分析と平行して行ってきました。したがって、私の頭の中では、ミクロ的関心とマクロ的関心は結び付いているつもりでいるのですが、端から見ると、二人の私がいるように感じられたかも知れません。

現在の研究

現在もミクロとマクロの両面に関心を持っていて、いくつかの研究を同時進行的に行っています。一つは、エジプトの調査環境が大きく変化した結果として可能となった社会調査を進めています。

10 年前には考えられなかったことですが、エジプトの中央統計局と学術協定を結んだことで、共同調査として、統計局の人材を使って、どの村でも調査することが可能になりました。そこで、今はとにかく社会調査によって、ミクロな立場からのみならずマクロの立場からも、家計データを中心とする統計データを集めることに集中しています。

もう一つは、歴史家としての関心に基づくものですが、データ分析というよりは、これまでの私自身の固有名詞にこだわった研究をいまいちど読み直し、それらをテーマごとにいくつかの叙述的な「作品」としてまとめてみたいと思っています。

さらに、近年は、上記二つの作業と同時並行的に進めているのですが、地域研究の領域において学際的な共同研究を組織するように努めています。結局のところ、地域研究は学際的研究た

らざるを得ないし、一人の人間の能力を考えると共同研究として展開されざるを得ないと考えたからです。それは具体的には、文部科学省の「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」の枠組みで行っている「アジアのなかの中東：経済と法を中心に」というプロジェクトです。

これは「ニーズ対応型」をうたい文句にした、地域研究プロジェクトです。そのため、このプロジェクトを実施するにあたって、これまで自覚的に考えることの少なかった、社会的ニーズとは何かといったことを少しは考えることになりました。そこで最後にその辺のことをお話したいと思います。

社会的ニーズとは何かについて、地理学者のオギュスタン・ベルクは『風土学序説』（筑摩書房、2002 年）のなかで、「理論と社会との架け橋となるはしご、こだわり、理論を現実化、世界化、具体化させる契機」だと指摘しています。つまり、理論と社会とのつなぎというものを意識させるもの、その言葉が社会的ニーズなのだということです。そして、ベルクは社会的ニーズを持った学問の在り方の一つとしてアンケート調査を取り上げているのですが、偶然にもそれは私が今回のプロジェクトで活用している方法です。

その背景にあるのは、人文社会科学で学際的な共同研究を可能にするには、ディシプリンの突合せではなく、分析道具の持ち寄りではないか、という私の考えです。アンケート調査は、その質問設定からデータ収集までに、現地語、地域社会への知見、統計処理など、特定のディシプリンを越えた「道具」の動員を必要とするからです。そして、収集されたデータについては、政治学、経済学、社会学などのディシプリンに基づいて分析して、学術論文執筆に利用してもらえばよいというわけです。

このような目的で上記プロジェクトを始めたわけですが、その過程で、エジプト、ヨルダン、イエメンの統計局との共同研究として、アンケートに基づく社会調査を実施してきました。たとえば、先に言及しましたエジプト中央統計局との共同世帯調査では、カイロ・アレクサンドリアの都市部で 5 つの地区、農村部で 19 の村落が調査対象になり、1 万 5000 を越える世帯のデータが収集されました。そして次のステップとして、追跡調査によるデータのパネル化を予定しています。

質疑応答

- (Q:) 質問と言うよりもコメントですが、今日の先生のお話のようにやっていくと、これは研究にならないのではないかと、やはり叙述なのではないかと感じました。それは叙述が悪いという意味ではなくて、研究とは別の括りのように思いました。研究というのはやはり要素、つまり説明変数を制限して、この説明変数はこう利いていますと分析するものですが、地域研究、あるいは先生

が言われる学際的、総合的とか、地域を全体的に理解するというときには、もう研究などというのはやめて叙述だと言った方がいいのではないかと思います。その点、今日のタイトルが「多元的歴史叙述をめざして」というものであり、また「地域叙述」ということも言われたので、これは面白いなと感じました。

（加藤：） 私としては、学際的なプロジェクトをみんなで一緒にやるときは、その成果は報告書でいいと思っています。プロジェクトの成果を使っただけの分析は、各自が単著でやればいい。つまり、データベース作成のレベルでの成果は報告書で十分であって、それを使っただけの精緻な分析は各自で好きなようにやればいいと思っています。私自身の好みといえば、精緻な分析に基づく学术论文の作成というよりは、それを核に定性的な情報を加味した地域社会についての叙述的な「作品」を作ることにあります。

もちろん、分析と叙述は地域研究の両輪であって、分析と叙述が別なものだとは考えていません。アンケート調査に関して述べたように、人文社会科学が依拠すべき情報やデータの何をどう集めるのかというレベルまで下りて議論をすると、分析か叙述かという違いを云々すること自体が無意味のような思えるからです。

（Q：） 最近、研究の社会的な意義について説明を求められることがしばしばあるのですが、歴史学の意味、あるいは、日本人研究者としてエジプトを研究されることについての社会的な意義というものを、先生はどのように説明されますか。

（加藤：） 私自身としては、正直に言って、この点を深く考えたことはあまりありません。先の社会的ニーズに関する説明のときに述べたように、「社会的な意義」を、「理論と社会との架け橋となるはしご、こだわり、理論を現実化、世界化、具体化させる契機」(オギュスタン・ベルク)のように、いわばアカデミックなレベルでしか意識してこなかったからです。つまり、「社会的な意義」なるものはすべて正確な現状把握から始まるわけですが、歴史的なパースペクティブや地域空間の認識なくして、どうして正確な現状把握が可能なのかということなのです。

（Q：） 特定の地域を研究することの意味をどのようにお考えでしょうか。

さきほど時間がなくて紹介できなかったのですが、そのあたりの議論は、ホーデン(Peregrine Horden)とパーセル(Nicholas Purcell)の書いた『The

『Corrupting Sea: A Study of Mediterranean History』という本での議論が参考になるかと思えます。そこでは、同じ歴史研究と呼ばれていても、「地域における歴史」(history in the region)と「地域に関する歴史」(history of the region)の二つはまったく異なるスタンスに立つ研究なのだということが指摘されています。

つまり、ある地域の中で起きた歴史を取り上げるのが「地域における歴史」であって、その地域がどのような歴史的な経緯でもって生成されたのかを研究するのが「地域に関する歴史」なのだと。そして、いくら「地域における歴史」を積み重ねても「地域に関する歴史」にはならないと述べられています。では、この分類を地域の研究に置き換えたらどうだろうかと考えました。

つまり、「地域における研究」と「地域に関する研究」の二つがあり、同じく地域という言葉に関していてもこの二つは別物であり、具体的で実証的な「地域における研究」をいくら積み重ねても、その地域がどのように形成され、その社会のあり方の特徴を論じる「地域に関する研究」にはならない。そして、「地域に関する研究」をやっているのだと自覚とスタンスを持ち続けていれば、どの特定の地域を研究していても、他の地域についての研究者とも共鳴するものがあるのではないのでしょうか。

(Q:) 先生の研究は誰との対話を意識して行われているのでしょうか。つまり、研究上の発見があった場合に何か実践的な形に結びつけられているのでしょうか。

(加藤:) さきほど述べました、所有権の重層的構造がパレスチナにおける農民の土地収奪に絡む問題点だということは、研究者はこれまでも、うすうす理解してきたのではないかと思います。しかし、それをはっきりと学術的な手続きでもって指摘すること、これが研究において重要なのではないかと思います。

おそらく、この指摘自体には、直接的で実践的な力はないでしょう。それを実践的な力とするためには、政治と結びつかねばならない。しかし、恐らく私があまり政治好きではないからでしょうが、この指摘を直接政治に結び付けようとは思わない。その結果、研究成果を機会あるごとに主張し、イスラエル国家のレジティマシーに疑問を呈することしかできない。力がないと言えばそれきりでしょうが、私個人の嗜好では、こういう形で研究成果を主張し続けることしかない。情けないですが。

(Q:) 一つの資料に集中するというお話ですが、私もそういった方法には非常に魅

力を感じるのですが、その一方で多くの資料を使って自分の議論を補強することで説得力を強化するという誘惑もあるかと思います。その辺りについて、先生はどうお考えでしょうか。

（加藤：） ひとつは、現実問題として、私が歴史家として、いつも多くの資料が利用可能だとは限らない状況で、資料を発掘しながら限られた資料のなかで研究を進める必要があったということがあります。この資料的限界を、歴史学は「資料考証」という手続きで補おうとしてきました。ここで、「資料考証」とは、事実関係の特定手続き以上に、そもその当該資料が残されたイデオロギー事情の分析を意味します。

「一つの資料に集中する」といったとき、それはこの「資料考証」に基づいて資料を読み込むという作業を言いたかったのです。ただし、資料分析とは別に、自分の研究の位置付けを明確にする研究レビューの段階では、異なる種類の資料に基づく研究について、必ずフォローするように努めてきました。そして、それを踏まえた上で、自分のオリジナルな研究としては、一つの資料を読み込むことに注力してきました。歴史研究者の性がこうした研究スタイルを取らしたのだと思います。